
幻想大陸鉄騎録

飴色蝸牛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想大陸鉄騎録

【Nコード】

N0436F

【作者名】

飴色蝸牛

【あらすじ】

古代日本風世界、蓬州。皇国兵士、石上和真は実力派部隊と名高い、玉燕の守備隊に配属されるが、隊員たちは揃いも揃って一癖も二癖もある奴ばかり。奇人変人に翻弄される和真の明日は…ま、何とかなるでしょう。設定の一部に矛盾が発生してきているので勝手ですが更新を中止します。後日再編集版を投稿しますのでよろしければそちらを見てください。本当に申し訳ありません。

序章・雨（前書き）

初めまして、飴色蝸牛と申します。「ハイテク古代日本」という訳の分からないテーマで書き始めた作品ですが、読んでくれた方々がわずかでも楽しんでくださったら幸いです。

序章・雨

幻想大陸鉄騎録

序章 雨

噎せ返る様な血臭はそば降る雨の中でも薄れずに廃墟と化した村を包み込んでいた。

その中で二つの人影が対峙していた。

一人は初老に差し掛かった男。服装から、指揮官クラスの軍人であると予想できる。

もう一人はまだ物心つくかつかないかといった年齢の子供。薄汚れた身なりの明らかに戦災孤児とわかる外見をしている。

互いに雨に濡れることも気にせずに静かに向かい合っていた。

「坊主、名前は何ていうんだ？」

孤児と目線を合わせるように屈み込み、初老の男、鎮西府権帥物ちんぜいふ・ごんのそつ部惟嵩は尋ねる。

いつの間にか周囲には彼の部下が集まりその光景を遠巻きに見ていた。

「……和真。」

かすかだが、はつきりと発せられたその名を聞いた男の眼は一瞬驚きに彩られるが誰一人としてそれに気づいた者は無かった。「……そうか、和真か……和真、大丈夫だ。もう危ないことは何も無いからな……。」

意味を理解できずきよんとする和真の頭を撫でながら、惟嵩は言い聞かせる様に繰り返していた。

時は皇歴2856年、この少年、石上和真いしがみ・かすまの物語が始まるのは更に14年の後のことである。

序章・雨（後書き）

登場人物の肩書きや役職は奈良〜平安時代にかけての律令制を参考にしていますが、蝸牛の独自の解釈や創作（笑）が、多分に含まれているのであまり真に受けないようお願いします。

第一章・大陸の堅塁1（前書き）

序章からかなり間が開いてしまいました。

第一章・大陸の堅塁1

幻想大陸鉄騎録

第一章 雲の道行き

夏とはいえ、まだ清々しい風が気前よく吹いている初夏、皇国領内では珍しいアスファルトで舗装された長い道路を一台のバスが走っていた。

しばらく進むうちに、変化の無かった景色の先に大きな灰色の壁に囲まれた建物が見え始め、やがてバスは正門から500メートルほど離れた場所に置かれた【玉燕基地前】と記されたバス停に止まり、すぐに土埃と軋むような音を立てて発車していった。

バスを降りたのは一人の青年だった。

まだ少年の面影の残る人の良さそうな光を焦茶色の眼に宿した青年、石上和真は今日から自分が配属される白嶺皇国水軍玉燕守備隊の基地を囲む高い壁を見上げた。

異動の知らせが来たのはつい先週のことだった。

皇国沿岸警備を任せられた防人さきもりの旅帥としていつもの様に近海や沿岸部に出没する海賊を撃退し、北西部の国府塩濱府しおばまに帰還した和真は、塩濱の国司の長官、赤城潮濱守忠典からの突然の呼び出しを受けた。

果たして自分は何か不手際をやらかしただろうかと首を傾げながら、行ってみれば近年最大の内乱、香明の役を生き延びた白髭の老將軍はまるで使い走りを頼むように、
「ちよつと玉燕まで行ってきたよ。」 などとのたまって下さったのである。

ここで和真の所属する国家、白嶺皇国の地理について説明してお

く。

蓬州大陸極東の島国である白嶺皇国は皇土と呼ぶ大島とその周辺の島々、及びその領海の他に、僅かではあるが大陸にも領土を持つ。そのほとんどが現在の同盟国である大陸東部の貴族制国家、琥邑帝国と西の強国、プロシヤの戦争において琥邑と共同戦線を張る条件として皇国側に割譲された領土である。

プロシヤを初めとする西方諸国と琥邑を初めとする東方諸国は、大規模な衝突こそ無いものの、絶えず小競り合いを繰り返している。皇国も例に漏れず、時折発生する破壊工作に対処するために、大陸領の入り口たる港湾都市玉燕に守備隊が置かれたのである。そしてそれこそが、今回和真が配属された皇国水軍玉燕方面守備隊なのである。

第一章・大陸の堅塁1（後書き）

更新が遅れてしまい、読者の皆様（いるのかな？（汗））には大変迷惑をかけてしまい申し訳ありませんでした。現在蝸牛は定期考査を目前に控え、なかなか携帯にさわる機会がありません。しばらくはこんなペースですが、時間を見つけて少しずつ更新していくので気長に待っていて下さると幸いです。

第一章・大陸の堅塁2

バス停からあるいて五分、正面ゲートについた和真は目の前の光景に思わず立ち止まった。

当然である。ゲート横の衛兵詰め所で金髪リーゼントとモヒカンの二人組が五年ほど前に流行った育成ゲームに興じる様を見れば、大抵の人は似たような反応をとるだろう。

どうやって話しかけよう、そもそも話しかけて良いものか和真が考えているとゲートを隔てた向こう側、敷地内から盛大な怒声が響き渡った。

「貴様等ア！！勤務時間内だと言うに何やっとなるか！！」

大気を震わすような覇気のこもった声に和真は反射的に直立不動の姿勢をとると共に、声のした方向を見るといかにも叩き上げといった様子の皇国陸軍の制服を身に着けた男が憤怒の表情を浮かべていた。

すっかり縮み上がったリーゼントとモヒカンを睨みつけ、旅帥らしい彼は更に続ける。

「いいか、勤務時間外なら酒飲もうが何しようがそれは個人の自由だ。だがな、卑しくも皇国の戦人^{せんじん}がそのザマで、後ろに控える大陸領と皇土が守りきれれると思っているのか！！……それとそこで突っ立ってる貴様！！何の用だ！！」

「ぼ、僕ですか！？」

いきなり鋭い声色で誰何され、戸惑う和真だったが、相手がまた雷を落としそうな雰囲気を感じ、慌てて敬礼をした。

「き、今日から玉燕守備隊に転属となりました、石上和真であります。」

「そうか貴様が石上和真か！！しかしそれならば何故いつまでもそこに突っ立っている？」

「えー何と言いますか……」

「まあ良い！！俺は久米典明。この基地の警備を任せられている。
和真と言ったか！塩濱守からの紹介状は持っているだろうな？」

慌てて鞆から取り出した封筒を見せると久米はそれを注視した後、
重々しく頷いた。

「分かった。ついてこい、案内してやる。」

第一章・大陸の堅塁2（後書き）

思った様にストーリーが進まない駄目色蝸牛です（汗）。他の作者さん達を書く方になって改めて尊敬しております。ちょっとずつでも更新していくので、どうか見捨てないで下さい。

第一章・大陸の堅塁3（前書き）

あらすじ変えました。

第一章・大陸の堅塁3

早足でずかずかと敷地内を歩いていく久米を見失わないようについでいくと敷地内でもひととき大きな格納庫らしき建物に案内された。

半開きになった引き戸の向こうでは蓬州における主力兵器、機竜が並んでいた。

「ぼさつとするな！今から貴様の事実上の上官となる玉燕の長官に挨拶に向かうのだぞ！！」

格納庫の中で翼を休める三匹の鋼鉄の獣に見入る和真の背に蹴りを入れて、久米は格納庫の中に入るといついてくるように手振りで命令する。

言われるままについていくと久米は右端の鋭角的なフォルムの機竜に向かつて歩いていき

「乃木司令！石上和真が来ました！」

「ちょ、ちょつと待って下さいよ！？ここ機竜の格納庫ですよね！？国司の長官つて執務室なりそれ相応の部屋にいるんじゃないですか？」

「おう来たか、予定より早い到着だな。」

機竜の各部位を点検している竜匠　機竜の整備を行う技術者達に向かつて声をかける久米に驚き、疑問の声を上げた矢先に兵部省で発行されている広報誌でよく見る顔の男、玉燕国司長官乃木忠興が竜匠のツナギを着て手を振りながら歩いてくるのを見て、和真は脱力してその場に膝をつきそうになった。

「長官ともあるう人間が何やってんですかこんなところで！！」

素に戻って怒鳴った後で鉄拳制裁を予想し恐る恐る周囲に眼をやると、

「もつと言え！！」と四方八方からの視線が語りかけていた。

周りの反応からこれがありふれた出来事であることを理解した和

真は深く溜め息をついた。

第一章・大陸の堅塁4

かつての上官であつた赤城を遙かに上回るエキセントリックぶりにあ然としていた和真は格納庫の扉の向こうから響く暢気な声によつて正気に戻された。

「あーやつぱりここにいたか。葵、四方姉さん呼べ。」

「はい！四方さーん！長官見つかりましたよー！！格納庫にいますよー！！」

振り向くと目の細い白髪の男と長い髪を後ろで束ねた女が微妙な表情を浮かべて扉のそばに立っていた。

それに気づいた乃木は手招きして二人を呼んだ。

「丁度良い所に来た。淳也、お前のとこの部下が来たぞ。」

「まじですか。使える奴ですかね。」

淳也と呼ばれた男はそんなやりとりをしながら和真に向き直る。

「池上淳也だ。お前の所属することになる第三機竜旅の旅帥りょってことになる……って、やめとけやめとけ。俺はそういうポーズは苦手なんだ。」

呆れたような表情で投げかけられた後ろ半分の言葉に、和真は慌てて反射的にとつてしまった敬礼の姿勢を解いた。

白嶺皇国の池上淳也といえば、大陸全域にその名を知らぬ機竜乗りはいないほどの天才機竜乗りである。

先のプロシヤ帝国と琥邑・白嶺連合軍の戦争において、哨戒任務中にプロシヤの主力機竜三機と遭遇し、ろくな火器も積んでいない哨戒用の壱型機竜で二機を撃墜した上で帰還したというのは、今も伝説として語り継がれている。

その伝説が目の前にいるのである。畏敬の念を感じるのも無理はないだろう。

「乃木長官！」

室内に漂う緩い雰囲気は凜とした声にかき消された。

見ると眼鏡をかけた柔和な雰囲気の女性が怒りと呆れが入り混じった表情で乃木に向かって歩いて来る所であった。

名を呼ばれた本人は涼しい顔でひらひらと手を振っている。

「よう、介殿。」

「ようじゃありません！国司の長たる貴方が不在の際に深刻な事態が発生したらどうするおつもりですか！！」

女性は相当怒っているようだが、その柔和な雰囲気ので殆ど威圧感が感じられない。

そんなやりとりを後目に和真は隣に立つ淳也に淡々と質問をする。

「隊正、あの人が四方さんですか？」

「ああ。」

「……四方ってあの四方一恵ですか？」

「他に誰が居る？」

五年前の文化の改革後女性で初めて四等官の職についた人物が目の前にいることに和真は軽く目眩を覚えた。

第一章・大陸の堅塁4（後書き）

白嶺皇国の軍隊の構成はこうなっています。軍団 校 旅 隊
火 伍 それぞれ、軍 毅 校 尉 旅 帥 隊 正
火 長 伍 長が指揮を取ります。また機竜部隊において隊正は二機
から三機の機竜を指揮します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0436f/>

幻想大陸鉄騎録

2010年10月9日07時03分発行